

林脩己先生のこと

小 泉 力

林脩己（はやし のぶみ）という名前をほとんどの人が知らないでしょう。その人は千葉県立園芸専門学校（現千葉大学園芸学部）創立当時の講師として本校の基本を築きました。その後千葉県立農事試験場発足にあたり園芸部主任技師として千葉県園芸農業の基礎を作られました。その生涯は20才から71才まで波乱に満ちたものでした。その概要を紹介したいと思います。

明治時代に英国の園芸と庭園を調査、研修のために留学した林先生は、欧米の園芸を知っている当時の最高レベルの園芸家・庭園家でした。明治前半期から終戦の直前まで日本の園芸と庭園に関わり、貢献した人生でした。

千葉県農業試験場の歴史を遡ると百年前には千葉大学園芸学部と一緒にあります。当初は東葛飾郡中山村（現在の船橋市下総中山駅前）にあり、数年して現在の園芸学部のある松戸の戸定ヶ丘に移転しました。当時の場長は千葉県立園芸専門学校校長鏡保之助かがみやすのすけが兼務していましたが、林先生は校長に協力し専門学校の基礎を築きました。

新宿御苑はやとで福羽逸人から園芸を学ぶ

鳥取農学校を卒業してから新宿御苑において福羽逸人はやとの下で見習生となり、20才から22才までの2年間には正規に新宿御苑に勤務し、福羽の命を受けて内国博覧会の審査に関わり審査報告を書くなどの任務を果たしています。

当時、福羽の下に集まった見習生が多々ある中で特に眼鏡に叶った2名の筆頭が林脩己でした。福羽は子弟に対して厳しい指導で知られ、メモは許さず記憶せよと言い、それができない者は到底見込みがないと言っています。これから考えると林はかなりの記憶力の持ち主であったといえます。当然のことながら福羽の満足する園芸技術とセンスの高さを以て期待に応えたと思われる。

当時の新宿御苑は皇室で使用する洋ランの栽培を行い、伝統の菊花壇の展示など最先端の園芸がありまし



氏 巳 修 林
林脩己先生肖像

たが、これを林は担当していました。

林脩己の園芸と庭園・造園に関わる業績は新宿御苑に入った20才前から始まり、生涯にわたって時代の先端を歩んできました。その活動範囲は我国では未だ新しい分野でしたが、福羽の厳しい指導の下で若くして才能が開花しました。そして、新宿御苑を離れてからも生涯にわたり福羽との師弟関係は変わりませんでした。

大隈重信の園芸主任となる

この優秀な技術者に目をつけて雇ったのが園芸趣味家で後の総理大臣・侯爵大隈重信で、日本園芸会の会長でもありました。その支持もあってか林は園芸の才能を発揮しましたので、他の政財界の有力者からも請われて庭園や温室管理を受け持っていました。

林脩己先生が明治・大正時代の園芸・庭園に残した業績とは何か？ 明治維新後に急速な西欧化政策が進み鹿鳴館時代が象徴しているような、明治の元勳や貴

族社会が取り入れた西洋風建築と日本建築、西洋式庭園と日本庭園の併用、夫人の洋装の導入等がミックスした華やかな社交界が繰り広げられました。高級園芸が流行し硝子温室で洋蘭・草花・観葉等の栽培が行われて、室内は園芸植物できらびやかに装飾されていました。特に大隈重信の園芸趣味は高度専門的であり、優秀な園芸家である林脩己を園芸主任として雇用し11年間（最後の2年は英国留学）園芸と庭園の管理をさせ、自らはメロンの栽培を指導する凝りようでした。

この間に於いて林は大隈の期待に応え、社交会場を飾る観賞植物による演出を行い名声を博しましたので、大隈邸以外からもその管理や指導を求められ、当時としては売れっ子の園芸家でありました。

英国留学

大隈邸での実績を基に英国園芸研修のチャンスが廻って来ました。林脩己は農商務省より海外実業練習生を命ぜられました。日本人園芸家としてまだ見ぬ西洋の園芸と庭園について研修する機会を得たのです。明治37～39年（1904～1906）まで足掛け3年、英仏米に園芸業を修業し、キューガーデン（Kew Garden）で学ぶ機会を得ました。このことは当時の日本の園芸関係者にとっては特別な好運でした。実際に英国の園芸や庭園を見ると共に調査・体験を通じて単なる旅行者では学び得ぬ多くの収穫を持ち帰りました。

英国到着直後にロンドンの大規模な園芸会社に調査拠点を決めたと日本への私信にあります（海外園芸家ロンドンだより 明治37年12月）。その後キューガーデンで学び英国王立園芸協会（RHS）の機関誌に英文で日本の園芸について投稿しております。内容はRHS会長から日本公使館への要請で、「日本の園芸について」の講演依頼で、その原稿と「日本のキク」の紹介でした。林は当時の英国王立園芸協会会員となり、研修は単に海外調査では終わらなかったのです。帰国後英国での調査報告は現在見つからないので研修の成果は文献としては明らかではありませんが、欧米研修の結果、園芸と庭園についてかなり詳細な観察をして来たことは確かであり、その後に具体的な成果として松戸の園芸専門学校の庭園構想にも反映されたと思われれます。

千葉県立園芸専門学校講師となる

帰国後は約束していた岩崎邸に明治39年に園芸主任

として雇われ、ここでも海外で学んだ西洋庭園が岩崎彌之助高輪邸に造られました（現在は開東閣として三菱の迎賓館として使用されている）、わずか2年で退職しています。その経緯は明らかではありませんが、雇用者であった岩崎彌之助の死去と明治42年（1909）新設の千葉県立園芸専門学校からの招聘が考えられます。

林は千葉県立園芸専門学校が設立されるにあたり請われて講師となり、装飾植物（花卉園芸）の講義と庭園実習の講座を受け持ちました。いわば千葉大学園芸学部の原点がここに 있습니다。当時の園芸専門学校をリードした教官は鏡保之助校長と林脩己講師だと思われれますが、この2人とも日本園芸会の理事で旧知の間柄であったことから鏡校長は開校にあたり福羽逸人の愛弟子で日本の園芸界での経験が豊かで、英国で園芸・庭園を学んできたばかりの林を必要としていたと思われれます。

誘いを受けた時点で松戸の戸定ヶ丘の学校校舎に併設した西洋庭園の構想を持っていたと思われれます。それは、現在に伝わるフランス式庭園、イタリア式庭園、イギリス式風景庭園と日本庭園である岩石園の一体的なガーデン構想です。

その庭園計画を生徒の実習で施工しました。予算も無く専門業者もいない時代、生徒を動員して、土手を切り崩しモッコで運んで地盤を作る作業を積み重ねて庭園を造ったその記録が、「千葉大学園芸学部創立100周年記念誌 戸定ヶ丘の時空百彩」に写真として残されています。林先生はよく生徒を指揮し庭園造りをされたと、当時生徒であった千葉大学名誉教授の穂坂八郎先生も語られています（花葉第2号の座談会に掲載）。林は単なる理論家ではなく自ら手にマメをつくって作業栽培するタイプで、教官と生徒が一体となった草創期の学園建設の心意気を感じられます。

学校では花卉も多彩な草花を栽培し、明治44年（1911）に千葉県庁新庁舎落成式に園芸専門学校が展示した室内装飾花壇には数十種の草花が使われており、これらは農場で準備されていたのですが、いずれも林講師の担当と思われれます。

林を招聘することが本校発足時のあり方を決める重要な要件で、林の構想は鏡・赤星両校長によってその後の園芸専門学校の庭園管理や草花栽培の基本となったかと思われれます。

初代校長鏡保之助は日本初の庭園論を講義しましたが、欧米視察は明治43年（1910）、林の欧米研修の4年後で林からの情報も得ての視察かと思われれます。

二代目校長の赤星朝暉の時代に戸定ヶ丘は益々美しくなり、最初に大正天皇が皇太子時代（明治44年）に行啓があり、更に昭和天皇も皇太子として行啓（大正15年）され、その後も皇室の御成りが戦前まで続きました。

与謝野晶子が訪れてその花園の美を短歌に詠んだ時代（大正13年）は、林が学園を去った（大正12年 1923）後ですが、戸定ヶ丘の庭園と花壇の美は完成期に至り世に知られました。この頃になると学校庭園の美化は既に後継教員によって維持できるようになっていたと考えられ、本校での目的を達成し、千葉農試移転を契機に学校を去る決心を固めたのではないのでしょうか？

林は元々公務員的な枠にとらわれず本校講師の職以外にも対外活動が多く、成田山公園の建設事業を初めとして、日露戦争で有名な元帥大山巖公爵の温室管理も講師となって以後も行っていました。そのほか明治神宮外苑設計委員を委嘱されています。また船橋での球根植物試験場でのチューリップの球根生産事業は失敗に終わりましたが、林の指導を受けた新潟の生産者は新潟県を日本一のチューリップ球根の産地化に成功しました。

成田山公園の庭園を造る

林は常に前人未到の境地を求めていたようであり、大正12年に新しく発足した千葉郡都村の千葉農試への転出を選びました。その前年の大正11年に林の後ろ楯ともいえる大隈重信と福羽逸人が相次いで亡くなったのも偶然の結果であろうか。

日本の園芸家・庭園家の林脩己が千葉県の林になったことが運命の分かれ道となりました。県職員となって庭園家としての業務はできにくくなったと思われませんが大工事である成田山公園（昭和3年竣工）を完成させ、成田山新勝寺は千葉県下有数の名利であり最後の庭園造成の仕事となりました。

なお、この造園工事について千葉大学園芸学部緑地環境学科の吉岡賢人氏が「成田山公園の設計と構成に関する研究」と題して詳細な卒業論文を書いているので参考にされたい。

千葉県農事試験場技師園芸主任となる

林は千葉県農事試験場技師・園芸部部长として千葉県園芸農業の指導者となりました。千葉農試での業績は園芸部主任として果樹、蔬菜、花卉を総括する立場

にありました。後に蔬菜の権威者として活躍した渡辺誠三氏は園芸専門学校時代の教え子であり千葉農試での部下として野菜技術、品種改良で多大な実績をあげています。林自身は花卉の専門家であったので、安房地域の露地草花で多品種の現地試験と促成栽培の産地指導を精力的に行っています。安房の花卉栽培の先覚者として知られている間宮七郎平や岩永益禪も林の指導を受けています。

林の最後の仕事として千葉県農事試験場「安房分場」設置の提案と建設を行っています（昭和9年完工）。その当時の様子を佐川美穂氏が暖地園芸試験場「50年の歩み」に記録しています。また後年、千葉農試に就職した坂本石蔵氏が親睦会の「みやこ」に、上司だった林の指導について尊敬の気持ちを書いています。また安房分場で普及した「石垣イチゴは林部長が力を入れられ当時の目玉商品だった」と元普及所長の加藤博氏が証言しています。

千葉県に転動した当時に県内に果樹苗、蔬菜種子配布の事業を提案し普及を図っており、これが市原試験地、原種農場の原点となっています。

千葉県では林の持てる経験・知識・技術の一部しか発揮できなかったが、県下に新技術を導入しました。しかし、得意の花弁園芸は戦時下に向かう国内情勢では相容れず、縮小・中止（昭和12年）の憂き目を見ることとなりました。

最後の職場は農試内に設置された傷痍軍人再教育所への転動です。ここの仕事については前述の「みやこ」に、本橋保男氏が缶詰め加工を傷痍軍人が研修したと書いていますが、林の園芸指導がどのような内容であったかは不明です。

時代は日本を戦争へと向かわせ、古き良き時代明治の西洋趣味の庭園や花壇は顧みられなくなり、日中戦争、太平洋戦争と共に西洋文化は排除され、その存在も忘れ去られてしまいました。

最近のガーデニングブームで英国式庭園は憧れの的となり多くのファンが訪英し感動していますが、同じ感動を百年以上前に一人の先覚者が味わっていたことを思い、その具現が園芸学部キャンパスであり、成田山公園の庭園でもありました。

林脩己先生は昭和20年、終戦の日を待たずして逝去されました。この日を越えて生存されていたならば、戦後の花卉園芸、庭園設計、建設でどれだけ活躍できたかと惜しまれてなりません。

林脩己先生の生涯

年 号	年 齢	事 項
明治7. 5. 26	0～17	鳥取県鳥取市に生れる 鳥取農学校卒業
明治27～28	21～22	新宿御苑研修生、福羽逸人の弟子として園芸を学ぶ
明治28～37	21～30	大隈重信邸の庭園主任となり温室、庭園管理を任せられる
明治37～39	30～32	英国研修派遣、併せてフランス・アメリカ視察
明治40～42	33～35	帰国後、三菱財閥岩崎家の園芸・庭園主任として勤務
明治42 ） 大正12	35～49	千葉県立園芸専門学校講師として観賞植物の講義・庭園実習を指導、現在の園芸学部内にフランス式庭園・イタリア式庭園・英国式庭園・花壇・講堂・牡丹園の設計、施工を指導
大正6	43	明治神宮外苑設計委員を命ぜられ、外苑事務取り扱いを囑託せられる
大正7	44	成田山公園の造園工事開始 千葉県立園芸専門学校生徒45名を引率し園路の杭打ちを行う
大正12	50	宇都宮高等農林学校にフランス式庭園設計 大正15年完工
大正12	50	千葉県立高等園芸学校が国立に移管し、農事試験場が千葉郡都村に移転 千葉農試に転職、技師・園芸部長として千葉県園芸農業の総括責任者となる
大正14	52	安房地域に花卉の促成栽培指導地を設け、間宮七郎平等を現地指導し、露地花卉産地育成に寄与
昭和3	54	成田山公園完工 日本庭園と西洋庭園が調和した市民に開かれた公園の開設
昭和8～9	59～60	安房地域で暖地園芸の拠点として安房分場設置を企画・設計・施工を行う 県内に果樹苗・蔬菜種子配布の事業を提案、市原試験地・原種農場の原点となる
昭和12	63	太平洋戦争に向かい花卉試験は中止となる
昭和14	65	千葉県傷痍軍人再教育所が千葉農試内に開設され園芸担当者となる
昭和20. 3. 13	71	逝去